番外編　仮面ライダージャスティス

キーショット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編　仮面ライダージャスティス

【Ｎコード】

Ｎ５０４５ＢＡ

【作者名】

キーショット

【あらすじ】

簡単に言うと仮面ライダージャスティスの番外編です。皆の過去などを書いていくつもりですので、本編と一緒にご覧いただければ嬉しい限りです。（Ｖシネマを意識しています。）

Fとした間に／康祐の過去

おぎゃー！おぎゃー！

元気な産声とともに生まれてきたのは、園崎家の長女の冴子。そして、次も元気な産声とともに生まれてきた赤ちゃんがいた。男の子である。名前は園崎・・・康祐。

それから9年後、次女の園崎若菜が生まれてきた。

～園崎家の庭

「康祐、今日の勉強は終わったのかい。」

「はい、お父様。終わったのですが・・・。」

「どうしたんだね？」

「冴子がまた若菜をいじめているんです。」

康祐が目を向けた先には冴子が若菜のクマのお人形を引き裂いていたところだった。

「いいわよね・・・若菜は遊べて！」

「ウワーーーン！お姉さまぁぁぁ！ウワーーーーーーーーーーーーン！」

冴子が人形を引き裂き、若菜の泣き叫ぶ姿を見ながら琉兵衛は笑っ

て言った。

「大丈夫。いずれ冴子はミュージアムを任せる者だからね。若菜のように遊ばせておくわけにはいかないのだよ。」

「ミュージアム？」

康祐は首をかしげる。

「あ・・・。博物館のことだよ。お前も頑張るんだぞ。」

「はい、お父様・・・。」

康祐はそう言うと庭から自分の部屋に戻りベットに横になった。さっきの【ミュージアム】という言葉が気になって仕方がなかった。だが、数分後そんな考えなど関係なく康祐は眠りへと落ちて行った。

3日後、冴子と康祐は世間見学という事でお散歩へと出かけていた。

「みんな小さいお家だな～。」

康祐は周りの家が自分の家よりも小さい事に驚きながら散歩をしていた。

「ほんとうね・・・。ねえ康祐、康祐はお父様のことは嫌いにはならない？」

「え、なんで？」

「だって若菜はあんなに遊べるのに何で私たちだけ遊べないのよ・・

・。お父様は若菜には甘くて私たちには厳しいじゃない！」

「でも、それって僕らのためを思ってやっていることだよ。若菜は僕たちと別な使命があるだけ。逆にいえば若菜はお勉強ができないんだよ？」

康祐はやんわりと冴子をなだめた。琉兵衛は冴子と若菜のケンカを止めないので、いつも康祐が仲介に入るのである。ちなみに康祐と冴子、康祐と若菜は一度もケンカをしたことがない。

「そうね・・・それもそうだね。」

「ところで冴子はお父様が言っていたミュージアムって知っている？」

昨日の気になったことを康祐は冴子に聞いてみた。まあ、ダメもとでだが。

「知ってるわよ。ガイアー。」

「康祐、冴子、お散歩は終わりだよ。さあ、帰ろうか。」

冴子がミュージアムのことをしゃべろうとしたとき琉兵衛が車で迎えに来たのであった。

「聞きそびれちゃったなぁ・・・。」

康祐は車に乗り込み下をうつむいていた。

～その日の夜

「冴子、ちょっと来なさい。」

琉兵衛が勉強中の冴子を呼んだ。いつもは勉強時間には声をかけない琉兵衛が呼ぶなんて珍しかったが、冴子は駆け寄って行った。

「どうしました、お父様？」

「いいかい、冴子。康祐にミュージアムのことを絶対に話すんじゃないよ。」

「！？どうしてですか、お父様？」

「康祐は冴子や若菜とは別の使命があるんだ。だから、黙っていてくれるね？」

「はい・・・。」

冴子はなぜ話してはいけないのかが分からなかったが、とにかく返事をして気を取り直し勉強を続けた。

～4年後

それから4年の月日が流れた。フィリップも生まれて康祐、冴子は13歳になっており私立風都高界中学校へと進学していた。
そして学校が終わると家で家庭教師と勉強・・・。勉強が終わるのは23時になっていた。

「ふう、終わった。散歩してリフレッシュでもしようかな。」

康祐は鼻歌を交えながら家から出て行った。いつものリフレッシュコースを散歩するつもりだ。
数分歩くと康祐は癒されつつあった。

「はあ～癒されるな。冴子もたまには歩けばいいのに。」

冴子いわく「こんな寒いのに歩くなんてどうかしてる！」らしい。若菜は論外だ。勉強してないのだから常時癒されているのだろう。しばらく歩きまわり康祐がそろそろ帰ろうと思った時、道に倒れている女の子を発見したのである。康祐はすぐに駆け寄った。

「ねえ、きみ大丈夫！？」

「う、うん・・・。」

少女はひどく疲れたようであった。見たところ自分と同じくらいの年で着ているワンピースもボロボロであったところから家出人だと悟った。

「お金が・・・。お金がないとまたあいつが・・・。」

「お金！？あいつって誰だい！？」

『俺だよ！』

康祐が少女に問いかけていると後ろからベンチを蹴飛ばして歩いてくるいー怪物がいた。

『兄ちゃん、その女の子をこっちにチョーだい！』

「どうして・・・ですか？あ、あなたは一体・・？」

康祐は少女を抱えて逃げようとしたが完全に足がすくんでしまい動けなかった。

―動けよ！動けよ俺の足！

『ああ、この姿だと怖いかな？』

怪物はそう言うと中年男性の姿へと変化した。

「改めてお兄ちゃん。その女の子こっちに渡してくれる？」

「ど、どうしてですか？」

「質問しているのはこっちなんだけどな～。まあいいや、力づくで渡してもらうから！」

【イート】

ガイアメモリから電子音声が流れ、男性はそれを顎に押し付けた。

すると中年男性はイートドーパントへと変身した。

『さあ、食べちゃおーっと！』

イートドーパントはそう言うと全身から口を出現させてそこから銃弾を発射した。

パパパパパパパパパパパパパァン！

「うわぁ！」

「きゃあ！」

2人は動けるようになった足で一目散に逃げ出した。

『待ってよ～！へへへ・・・。』

イートドーパントは口を開け閉めしてゆっくりと2人を追いかけようとしたが後ろから蹴り飛ばされた。

「子供相手にいい趣味してるじゃねえか。」

『お前は・・・鳴海荘吉（なるみそうきち）！』

「ほう、俺の名前を知ってるのか・・・。まあいい。」

荘吉はロストドライバーを装着し、スカルメモリを起動させた。

【スカル】

「変身。」

そう言うと荘吉は仮面ライダースカルへと変身した。

『いくぜ。』

スカルはスカルマグナムを構えた。

『へへ、今はあんたと戦ってる場合じゃねえからな・・・。あばよ

！』

イートドーパントは腕に巨大な口を出現させ自分の体を食べだした。

『させねえさ。』

スカルマグナムから数発弾を発射したが遅くイートドーパントは消えていた。

『フン。』

荘吉は変身を解除し康祐と少女に駆け寄った。

「おい、坊主たち大丈夫か？どうしたんだこんな夜中に。」

「それは、僕が聞きたいよ。どうしたの君？名前は？」

康祐は少女に質問した。

「私は・・・夕頭亜美（ゆうずあみ）。この子とはさっき会っただけです。」

「そうか・・・。なんでさっきドーパントに襲われていたんだ？」

「あの怪物は私の病気を少しずつ食べてくれるの。」

「病気を食べる！？・・・すいません。」

康祐は急に声を出したことに少し恥ずかしがってうつむいた。

「続けな。」

「はい。私不治の病にかかってるんですけど、あるとき友人から【延命屋】という所を紹介されたんです。」

「延命屋？なんだそれは？」

「私もよく分からないんですけどそこの人が「あなたの痛み、苦しみを食べてあげる。」って。実際、痛みも全然ないし。」

「それがイートメモリの能力か・・・。ありがとうな。亜美は家へ来な。坊主はさっさと家に帰りな。」

「分かりました。」

そう言って康祐は家へと戻った。

～次の日の朝

「お父様、昨日の夜奇妙な怪物を見かけたんです。」

「ほう。それはどんな怪物かね、康祐？」

「なんだか口がたくさんあるやつでした。」

康祐は説明したが琉兵衛は信じてないようである。

「ハハハ、寝ぼけているんじゃないか康祐？」

「そんなことは・・・あ、そういえばそいつＵＳＢメモリ持っていました。」

「！？」

琉兵衛の表情が一変した。今までの穏やかな表情のままだが、すこし冷やかな目となっていた。

「そのことは忘れなさい、康祐。さあ、学校の時間だよ。」

「はい、お父様。行ってきます。」

康祐は中学校に向かうために家を出た。そのやり取りを見ていた冴子は「それってガイアメモリでしょ。」とか、「ドーパントじゃないそれ。」とうっかり言うのを我慢していたのであった。

「さて、どうしたものかな。康祐がそれを知ったとなると・・・。」

琉兵衛の表情は眉間にしわを寄せ険しかった。と、その時白衣の男性が玄関から入ってきた。

「こんにちは、園崎琉兵衛さん。財団Ｘの丹羽（にわ）　介（かい）と申します。」

「ほう、財団Ｘか。ずいぶんと早いな。いろいろと話すこともあるから中にはいりたまえ。」

琉兵衛はそう言って介を家の中へ向かい入れようとした。そのとき介は盛大にくしゃみをし、そして何事もなかったかのように「失礼します。」といって入って行った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ　・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5045ba/

番外編　仮面ライダージャスティス

2012年1月13日23時52分発行